

赤膚焼の歴史

29期生

I テーマ設定の理由

父親の影響であろうか僕は子供の頃よりの歴史好きである。本を読みながら楽しく学んできた。しかし近頃になって英雄の伝記や歴史の表面のことしか知らない自分に味気なさを感じだすようになった。その時、目の前に現れたのが自由研究だ。よしこれを利用して一度、どんな本にも載っていない歴史を調べてやろうと決意した。歴史の中に一種珍妙な場面がある。天下の権を握った信長や秀吉が、あれだけの大きな城に住みながら、1個の陶品に執心するのである。また、世界のどの国を見ても日本のように日常の生活用品を、芸術品としている例は少ない。なぜ英雄達は一かけらの茶碗に熱中し、なぜ日本人は、生活必需品を芸術にまでしたてあげたのだろうか。その解答に一步でも近付こうと考え、幸いにして拙宅の近くにある古くからの陶芸、赤膚焼の歴史を調べることにした。

II 研究方法

赤膚焼の歴史ほどやっかいなものはない。その歴史は遠く大和時代にまでおよびたいへん奥深い、文献がまったくない。それゆえに、僕の研究は赤膚焼元窯である古瀬氏から聞いた話や、歴史的事項から自分なりに推測したことを中心にすすめていきたい。

III 研究結果

(1) 赤膚焼の前身(大和～室町時代)

(1) 豪族土師氏との関係

赤膚焼、という名称は江戸時代からついたがその前身が大和時代から存在したことは当時五条山(赤膚山の正式名)一帯、これを菅原の地というがその菅原の地に領土をもっていた土師氏から推測できる。土師氏が奈良にいたことは、氏寺のあることや、土師氏の名が後に菅原氏に改められたことから証明できる。この土師氏は土師器(弥生式土器の少し進化したもの)を製造することを仕事としていたのだが、もしかすると土器をつくる粘土が五条山から採れることを知っていてこの地に住んだのではないだろうか。奈良時代になると平城京が建設され、たくさんの寺社が建立され、人々がどんどん奈良の地にやってきた。このときのかかわりや土器の需要は想像を絶するものでそれらの供給にも五条山の粘土が一役かっていたと考えることができる。

(2) 奈良風炉



興福寺の門跡の1つである大乘院の日記、大乘院寺社雜事記は、長祿3年(1459)5月28日の項に大乘院に出入りしている座を上げている。

その1つに「ヒハチ西の京」というものが出てくる。ヒハチとは火鉢のことである。西の京とは五条山から歩いて20分程度の距離にある。この西の京にちなんだ奈良の名物(かわら等陶器類)はたくさんあるがその中で最も有名なのが奈良風炉である。風炉とは茶の道具の1つで奈良風炉は当時から相当評判であったらしい。さらに西の京を中心とする奈良一帯に陶業がさかんにおこなわれていたことを証明するものとして「三十二番職人歌合」がありその中のひはちうりの項で南都の粘土の質をほめ、京都にも多少運ばれていたことを語っている。この西の京一帯におこっていた陶業については、付近に粘土のとれるところが少ないことや距離的な面からも考えて五条山の粘土が関係していたと断言できる。



(3) 名前の由来

少し余談ではあるが赤膚という名前がなぜついたかということについて話そう。まず、焼き物にある人が赤膚焼という名をつけ、その後粘土の採掘場であった五条山にも赤膚山という名がついたと仮定してみよう。だがこの仮定の矛盾をつく資料がある。百人一首の名歌わが庵は…の作者喜撰法師のつくった歌に「世を憂しと 思い入れとも 赤はたの 山は身をこそ 隠さざりけり」という歌がある。この歌にまさに赤はた山が登場している。喜撰は平安前期の人物で、赤膚焼の名がついたのは江戸前期であるから前の仮定はまちがっており焼き物の名よりも山の名の方が先であったと考えられる。ではなぜ山にそういう名がついたか。このことについては寛政3年(1791)に刊行された「大和名所図会」という本の中の五条山の項に五条山、五条村にあり、赤土の禿山にして不毛の地なり。とあることから昔五条山ははげ山で赤土のため山はだが赤かった。しかも木がないため遠目からも美しく見えたのであろう。赤い山膚の山、赤膚山。どうやらこれが真実のようである。

(2) 赤膚焼の成長(安土桃山～江戸中期)

(1) 小堀遠州の七窯

桃山時代になると大和には豊臣秀長(秀吉の弟)が入封した。秀長は、すべての面にわたって有能な男で、その経済感覚から、国内に産業をおこし、よって財政を富ませようという考えを持ち、五条山に微々として続いていた陶業に目をつけ常滑(愛知)から陶工与九郎を招いて焼き物を起こさせた。これが赤膚焼の起こりである。しかしこの赤膚焼は、与九郎が実在したのか、赤膚焼という名称があったのか、等疑問が多いため、一概に赤膚の出発点と呼ぶことはできない。そのためここでは、伝説上の起こりと考えておくことにする。この時代の有名な茶人に小堀遠州という男がいた。彼は自分の好みの窯七つをあげたがその中に赤膚がはいっている。これについても疑問があるがここでは省くことにする。

(2) 初代治兵衛時代

赤膚の歴史がナゾであることを象徴するようにその中興の祖である初代治兵衛の一生もなぞである。治兵衛が活躍したのが江戸中期であるから前述の秀長の時代か

らは相当とんでいる。おそらく不振だったのだろう。この焼きものに活をいれ中興させたのが、当時の郡山藩主柳沢堯山である。彼は先代から五条の地に住んでいた古瀬治兵衛というものを主として焼き物を起こさせその後いろいろな面において後から力をかけた。また印として「赤ハタ」という文字を彫ったものをあたえた。もともと治兵衛は京都から招かれたのだという説が強かったが最近治兵衛の子孫にあたる古瀬家の人々の調査によって偽説であることが証明された。

(3) 赤膚焼の没落（江戸末期～明治・大正）

(1) 没落の前兆

柳沢堯山の後援によって再興されある程度の栄えをみせていた赤膚焼はまた再び衰退への道を歩みだした。堯山が文化11年（1814）に隠居し、またその後を追うようにして初代治兵衛が死去した。2代目治兵衛の晩年には弟子の1人森本助左衛門という五条山の陶工が山城に新しい焼き物をおこしそれに同調した者たちが相当な数赤膚の地を去っていった。

(2) 3つの窯

3代目治兵衛は代々の治兵衛の中で文献にかきのこされた唯一の人物である。内容は「治兵衛とは3代目で祖父は京都からやってきて焼き物を始めた。40才である。祖父についてはわからないことが多い。五条焼き物は3軒あるが、治兵衛のところは元窯である。」この文章より、当時の赤膚焼が3つに分立していたことがわかる。この3つはおそらく俗にいう「東の窯」「中の窯」「西の窯」（図参照）のことであろう。このころの赤膚焼は幕末の政情不安定と人心の混乱のため相当衰微していたようである。

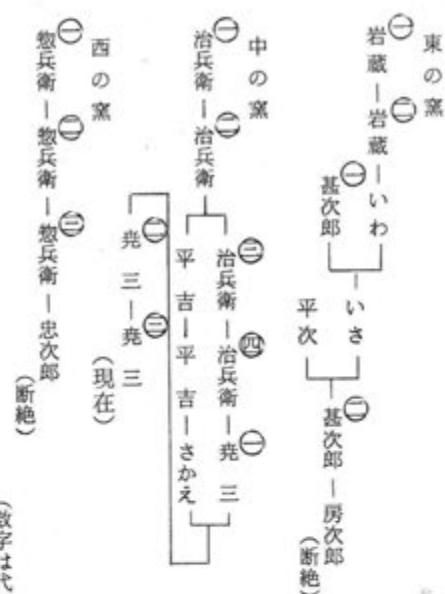
(3) 天才奥田木白

幕末になって衰退の方向へ歩み続ける赤膚焼に小康を保たせたのが奥田木白という名人である。この男は天保の頃から楽焼をはじめたが間もなく大茶碗5個をつかって西大寺の大茶会用に寄進している。西大寺の大茶盛は奈良の年中行事として有名であるが、同寺では現在でも木白の大茶碗を大切に保存している。赤膚焼の特色の1つに萩ぐすりの使用があるがこれも木白によって始められた。彼は色々の焼物に長じていた。彼の子の作次郎も同じく木白を名のり、印が同じためその区別がつきにくい、技術は父に勝るといわれている。

(4) 4代治兵衛時代

4代治兵衛の一生ほど苦しかったものはない。明治の新しい思想や制度、文化の流入は古い陶芸に対して一般人に偏見を持たせたことはいままでもない。明治4年（1871）、木白が没した。彼によって一時小康をたもった赤膚焼がいかに彼を救世

<赤膚焼系図>



主として欲していたかは後にニセ物がはんらんしたことからわかる。明治7年（1874）には作品を県の博覧会に出品し賞をもらったが、このあたりから治兵衛の生活は急速に悪化していったのである。もっとも「中の窯」ばかりでなく「西の窯」でも忠次郎という者があとをついだ直後歴史から姿を消している。「東の窯」では当主が死亡わずか13才の房次郎があとをつぐという不幸な事態になってしまった。しかしこの房次郎は長じてからたおれた赤膚焼を再興しようと必死の努力をするのである。そしてついに19年4代治兵衛は不遇のうちに死去、子供の徳次郎17才ではとうてい「中の窯」を維持することはむつかしく、一家はちりちりになり、窯は房次郎のおかげでなんとか成立している「東の窯」に道具ぐるみ買いとられた。しかし、後に房次郎の死と「東の窯」の没落によって再び売りに出されたのである。しかしこれが不幸中の幸い買いついた人が古瀬家の遠縁にあたるのだった。

(4) 赤膚焼の復興と現状（昭和時代）

(1) 1代堯三

遠縁の者の理解によって一家離散後大阪で働いていた徳次郎が呼びかえされ5代治兵衛として再び仕事を始めることになった。そして彼は江戸中期、中興の際力を借してくれた柳沢堯山の堯をとり堯三となった。東西両窯の滅亡の中でただ1つの窯を守り続けてきた堯三の努力は並のものではない。

(2) 最高の繁栄

現在の赤膚焼は、7代目治兵衛にあたる古瀬堯三氏が中心となっている。また大塩正人氏等の新興勢もさかんに焼いている。今日の芸術ブームにのりきっているという感じが強い。しかし反面、販売競争や、よそから運んできた粘土で焼くといったように、芸術として行っはならないことを公然とやっているようにも見える。今、最高の栄えを見せているこの焼き物もまだまだ前途多難なようである。

IV 結論

この研究をしているうちに僕はおもしろいことに気がついた。芸術だけの歴史は絶対に成り立たない。ということである。読者もうすうすおわかりのことかと思うが、この赤膚焼の歴史は政治の流れや、考えのうつりかわりに常に影響されつづけた。また今日の栄えがあるのも一つには、現代の人々の考えが古いものを見直そうという方向へうごきだしたからだといえる。歴史はすべてがつながりをもっているということは前から知ってはいたがこれ程実感として受けとったのは初めてだ。

V 総括

当初の目標であった日本人はなぜ陶器を愛するのか。という疑問に対しての解答を得ることができなかった。その理由として赤膚焼自身が焼き物の主役ではなく、割と地味な焼き物であったことや、歴史点観点からしか見ず、美術的な目で見なかったということなどがあげられる。また調査のあいまいな点がたくさんあって、決定的な断定をすることができなかった。歴史の追求ばかりに追われて現状や今後の問題点を深く調べられなかったなどが反省である。前述したが、赤膚焼の歴史は時流と相当強く結びついており、比較的、推測や仮定がたてやすく今迄の歴史の知識をフルに使用できなかな興味深い研究であった。